

令和8年度鈴鹿市教育研究推進支援事業実施計画書

1 主題

対話を通して、学びを深め合うこどもの育成 ～え！？学、あ！学、自学、学びの好循環をめざして～	
教科・領域	算数科

2 主題設定の理由

本校児童は、提示される課題に対してまずは考えようと取り組む姿勢が見られ、わからないことがある時には、教師や友だちに助けを求める姿が見られる。小グループでの対話では、学習課題に対して様々な解決方法で考えようとし、「箕田の話したいわ、聞きたいわ」の1つでもある「わからないことを一緒に悩む」姿も増え、自分たちから小グループでの対話を申し出ることもある。また、誰と対話をするかを児童が選択し、課題解決のために自分に何が必要か、目的をもって取り組むことができる児童もみられるようになった。

しかし、互いに意見を言い合って終わったり、課題を解決した児童が一方向的に伝えて終わったりと、対話として成立しているとは言えない場合もある。この実態の背景としては、語彙力の不足、読解力の低さ、学級の横のつながりの薄さが考えられ、基礎学力の定着と仲間づくりの両方が必要だと考えられる。非認知能力においても、「自制心」や「やりぬく力」を意識させることで、学ぶ力になるのではないかと考える。また、児童が対話することで学びが「深まった」と肯定的に考える場合、どこに目標をおいて「深まった」と考えていたか、深まったと考えられる目指す姿とはどういうものなのかということが定かではないという点も課題として見えてきた。

2年目となった昨年度では、対話をして深まるとはどのような状態なのか、どの授業にどのように対話をいれていくことで学びが深まっていくのか、児童の学びをどうやって確かなものにしていくのか、そして、それを教師がどうみとっていくのかを議論し、検証した。まず、学びを確かなものに手段として、ふりかえり(以下、学びたいわ)の時間を確保した。学びたいわの項目を「算数」、「対話」にすることで、1時間の学びを言語化することができ、単元の前後の関係をつなげて考えられる児童が増えた。そして、「誰と」「どのように」「なんのために」学ぶのかについて考えようとしている姿が多くみられた。児童の45分の様子と学びたいわを照らし合わせて考えることで、教師も児童の学びが把握しやすくなり、より一人一人にあわせて声をかけられるようになってきた。課題として、学びたいわを考えるための時間の確保があがったが、それを考えることが、より目的に迫った授業を考えることにつながり、今までそれぞれの教師にあった固定概念を改め、授業改革を行うことができた。

年度末には、引き続き、どの時間にどのように対話をさせていくことが深い学びにつながっていくのかを考える必要があると話し合った。児童のアンケート結果から、「箕田の話したいわ聞きたいわ」を自分の考えの広がりや深まりがあるから楽しいというような内容の意見が増えたことがわかった。その一方で、算数科の授業が「楽しかった」と解答した割合は減少した。「楽

しいときがわかったとき」という回答が多かったことから、教師がもっとわかる授業にしていかなければならないこともわかった。そのため、児童が「わかった！」と思える瞬間が増えるように、学習を下支えする基礎学力の定着にも焦点をあてる必要がある。

今年度は、2年間で積み上げた授業スタイルの要素を、単元を通して考えたときに、どの授業でどのように用いていくかを検証する。さらに、学級の児童と職員室の教職員集団が相似であると考え、研修を通して、教職員一人ひとりが協働的にスキルアップしていくようにしていく。2年間研修をしてきた算数科を通してさらに、深い学びとしたい。そのため、副題を「え！？学」(学びの計画をえがく、課題についての「え！？」という疑問)「あ！学」(解決のために試行錯誤するあがく、わかったときの驚きや喜びの「あ！」)「自学」(自分がどのような学びをしたのか、振り返り言語化する)の3つの学に定め、このサイクルを児童だけではなく、教職員集団も循環させていくことで対話を生み、主題に迫っていきたい。

3 研究内容及び方法(できるだけ詳しく書いてください)

(1) 研究内容

児童の伝え合う力を高め、思考力、想像力、表現力を育成するために、算数科における対話を中心に据えた授業研究を行う。

本校で考える「対話」とは、それぞれが思ったことを好きなように話すことではなく、学習の課題について、話し手も聞き手も相手のことを大切にし、お互いの発する言葉を理解しようとし続けることの連続であると定義する。また、相手に伝えようとし、相手の考えを聴こうとすることで、自分の言いたかったことも整理されることである。

また、「学びを深め合う」ためには「会話(取り留めのない話をやりとり)」をするのではなく、「対話」をすることで、相手の考えと比較したり、自分の思いや考えを整理し、新しいことを発見したり、よりよいものを生み出したりしていくことと考え、協働的な学びを深めさせていきたい。

(2) 手立て・指導について

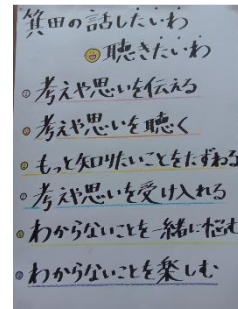
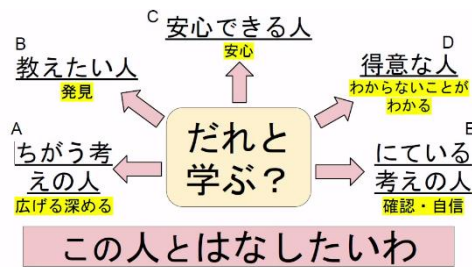
○学習意欲を高める課題の設定からめあてへ

課題は、学習内容に応じてこどもたちの興味・関心に沿ったもの、様々な考えが持てるもの、既習事項とつなげて考えられるもの、発展性(広がりや深まり)が期待できるものの中から考える見通しがもちやすいように具体的に設定していく。そして、児童が課題解決のために、問いをもったことをすくい上げ、問いを共有し、それをめあてととする。めあてには、「？」を用いることで、まとめにつながるものとする。練習問題の際は、一人ひとりが自分の力に応じためあてを設定していく。

○ペア・グループ・フリー対話

児童が必要性感じられるように、すべての教科領域でペア・グループ・フリー対話を取り入れていく。対話をするときの約束を全学年で示し、本校のスタイルを更新していく。それにとまって、座席の形も目的にあったものとする。

- ・ 全員前向き→教師との対話、自分との対話、一斉に指示する場合、黒板に注目させたい場合
- ・ グループ→班で一つのものを中心に置き、話し合う場合
- ・ コの字→全員で対話を行う場合
- ・ フリー→誰と話して何を学ぼうとするか選択する場合



○学習形態の選択

学習に応じて課題解決に向けた学習活動の方法を学年に応じて子ども自身が選択できる余地を作っていく、高学年で学び方の選択ができるようにする。

学習用具の選択

・ノート、chromebook、図書室の本、辞書、資料集など

学習スタイルの選択

・ペア、グループ、フリー

○学習環境の充実

単元に関連する既習事項を教室掲示し、児童の学びの手助けとなるようにしておく。

○ICT の活用場面を想定

単元を構想する上で、より学びが深まる方法として、ICT の有用性{①情報を 2 人以上でシェアする、②情報を同じ目的(統合、分類、比較、関連付けなど)に沿って操作する}を引き続き探っていく。また、系統的に ICT の使用方法を学ぶことで、高学年で、今の自分や目的に合った手段を考える際、ICT 利用を選択肢に入れることができるように、技術をつけ有用性を体験させる。

○児童と教師の対話(教師の言葉へのこだわり)

学習中の児童のつぶやきを広げ、学習を組み立てていく。教師が「わかった?」「できた?」と聞く場合、わかっていなくても「わかった。」と児童は話す。児童が素直につぶやける学級的环境をつくるとともに、つぶやきをコーディネートする教師の力量を日々高めていく。引き出したつぶやきとはどのようなことか、そのつぶやきをどう活かしていくかを探り、積み重ねていく。

○ふりかえり活動の充実

・学びたいわ

算数科の授業の最後に1時間の学びと対話はどうだったのか、考えを整理したり、新しい課題を発見したりする時間を設ける。

(低学年5分 中学年10分 高学年10分)

・非認知能力の育成

「やりぬく力」「自制心」

単元の初めや単元の切り替わりの時間に非認知能力である「やりぬく力」「自制心」の個人の目標を設定し、毎時間児童が評価していく。